

学生取材レポート

第 14 回京都教育懇話会「グローバル時代の人づくり」

1月21日、京都市上京区の「京都まなびの街生き方探究館」で第14回京都教育懇話会が開催された。テーマは「グローバル時代の人づくり - キャリア教育を考える -」。第12回に開催された「超就職氷河期検証～就活は小学生から～」の第2弾としてとり行われた。

雇用問題や若者の内向き志向が社会問題として提唱される中、学校教育はどうあるべきか。地域と連携し、働く事の大切さを小中学校から学ぶ「生き方探究館」で、市民を交えた活発な意見が飛び交った。生き方探究館館長で村田機械代表取締役会長の村田純一氏の基調講演に続き、有識者らのパネルディスカッションが開催された。パネリストは、村田氏に加え、ジュニアアチーブメント日本専務理事の中許善弘氏、京都市教育委員会主席指導主事の初田幸隆氏、京都市長である門川大作氏の4名、コーディネーターに京都産業大学経営学部准教授の松高政氏を迎えた。

第一部の基調講演では、「教育はその国の未来を支える。今後の日本をどう見るか。教育を中心に真剣に考えていかななくてはならない。」という村田氏の熱い言葉から始まった。現在は就職氷河期ともいわれ、これからの日本を支えるはずの大学生の内向き志向、活力のなさが指摘され、社会性が問われている。そんな問題に対して村田氏は「小さい時からの教育が重要だ。子供の時から人と接触する、物事を経験する、そういう場数を踏む事で人は成長していく。」と、社会との繋がりをもった教育をもっと早い段階から学校現場が取り入れていく事が必要だと語った。「時間はかかるだろうが、今後日本は大きく変化の時を迎える。時代の大きな変化は、教育も根本から変えることが出来る大きなチャンスである」そう締め括りパネルディスカッションにうつった。

前回のテーマ「～就活は小学生から～」の名付け親でもある中許氏は、「学校の座学で発見できなかった生徒の個性を、現場で発見することが、キャリア教育の原点だ。しかし、それを先生方が把握していないことに非常に危機感を感じる。」と語り、学校現場の現状に難色を示した。それに対し初田氏も、「学校生活の中で、自分の役割が一体何であるかを子供たち自身に、考えさせていく必要があり、もちろんそれを評価する学校現場の先生の資質も問われてくる。」と、社会全体地域なり保護者なりから、子供の育ちをしっかり全体で見えていく雰囲気作りが重要だと述べた。

門川氏は生き方探究館という新しい教育システムを取り入れた事に対して、「All Kyoto.いわゆる社会総ぐるみで地域の子をそれぞれ育てていく」と主張。最後は、パネリストとコーディネーター全員が、今の日本の教育の最重要課題は、「学校現場の意識改革に加えて、社会総ぐるみで子供を育てる」とする共通認識で一致し、華やかなパネルディスカッションは幕を閉じた。

【取材：阪口彩子(立命館大)】